

言語系統表

1. 歴史時代の言語名は並列されているが、最古の文献の年代は同じではない。空らの所も勿論古代・中世の言語があったが、主要なもの以外は省略した。
2. 現代語は主要なものだけを挙げてある。
3. 語族の確立していないものは諸語としてまとめてある。

語 族 ・ 語 派		歴 史 時 代		現 代 主 要 語
		紀 元 前	紀 元 後	
I. インド・ヨーロッパ (印欧) 語族				
インド・イラン語派	インド語	ヴェーダ語 サンスクリット語	パーリ語 プラークリット語	ベンガリー語 ヒンディー語 ウルド語 パンジャブ語 グジャラーティー語 マラーティー語 ネパール語
	イラン語	アヴェスタ語 古ペルシア語	パーラヴィ語 ソグド語	現代ペルシア語 クルド語 パシュトー語
アルメニア語派				アルメニア語
アルバニア語派				アルバニア語
バルト語派			古プロシア語	リトアニア語 ラトヴィア語
スラヴ語派	南スラヴ語		古代教会スラヴ語	ブルガリア語 スロヴェニア語 セルボ・クロアチア語
	西スラヴ語			スロヴァキア語 チェコ語 ポーランド語
	東スラヴ語			ロシア語 ウクライナ語 白ロシア語
ギリシア語派		諸方言	コイネー・ギリシア語	ギリシア語
イタリック語派	ラテン語	古典ラテン語	俗ラテン語	イタリア語 スペイン語 ポルトガル語 フランス語 レト・ロマン語 ルーマニア語
	オスク・ウンブリア語	オスク語 ウンブリア語		

(ロマンス語派とも)

語 族 ・ 語 派			歴 史 時 代		現 代 主 要 語
			紀 元 前	紀 元 後	
ケルト語派	ゲール語	ゲルト語碑文			
	ゲーリック語		古アイルランド語	アイルランド語 スコットランド語 マン島語	
	ブリタニック語		古ウェールズ語 古ブルトン語	ウェールズ語 ブルトン語	
	東ゲルマン語		ゴート語		
	北ゲルマン語		古ノルド語	アイスランド語 ノルウェー語 スウェーデン語 デンマーク語	
	西ゲルマン語		古高・中高ドイツ語 古期・中期英語	ドイツ語 オランダ語 フリジア語 英語 アフリカーンス	
	トカラ語派		トカラ語		
	ヒッタイト語派	ヒッタイト語			
II. セム語族					
東セム語派	アッカド語 バビロニア語				
西セム語派	ウガリット語 アラム語 シリア語 フェニキア語 ヘブライ語			ヘブライ語	
南セム語派	古典アラビア語			アラビア語 エチオピア語	
III. ハム語族			古エジプト語	コプト語	
				リビア語	チャド諸語 ベルベル語
					クシ諸語
IV. ウラル語族					
フィン・ウゴル語派			古ハンガリー語	フィンランド語 エストニア語 ラップ(サーミ)語 ハンガリー語	
サモイェード語派				サモイェード諸語	
V. アルタイ語族					
チュルク語派			古チュルク語	トルコ語 ウズベク語	
モンゴル語派				モンゴル語	
ツングース語派				満州語 オロコ語 オロチ語	

語 族 ・ 語 派	歴 史 時 代		現 代 主 要 語
	紀 元 前	紀 元 後	
VI. シナ・チベット語族			
中国語派	シナ語		北京官話 諸方言
チベット・ビルマ語派		西夏語	チベット語 ビルマ語
タイ語派			タイ語
VII. マライ・ポリネシア語族 (オーストロネシア語族)			
インドネシア語派			インドネシア語 マライ語 ジャワ語 タガログ語
メラネシア語派			フィジー語 ソロモン, ビスマーク, マーシャル各諸島, お よびミクロネシア各島 の言語
ポリネシア語派			ハワイ語 タヒチ語 サモア語
VIII. オーストロ・アジア 語族			ヴェトナム語 クメール語 モン語 ムンダ諸語
IX. アフリカ諸語			
ニジェール・コルドファ ン諸語			スワヒリ語 ズールー語
ナイル・サハラ諸語			スーダン諸語
コイサン諸語			ブッシュマン語 ホッテントット語
X. アメリカ先住民諸語			アメリカ先住民語 イヌイト語
XI. オーストラリア諸語			オーストラリア諸語
XII. ドラヴィダ諸語			タミル語 テルグ語
XIII. コーカサス諸語			グルジア語 その他コーカサス諸語
XIV. 孤立した言語			
極北諸語			アイヌ語 ギリヤーク語 カムチャダール語
そ の 他		古代朝鮮語 古代日本語	バスク語 朝鮮語 日本語 (琉球語)

言語学年表

*主要言語学者の主著・雑誌創刊・学会創立を収める。

*1項1行主義のため書名等を簡略化したところがある。

4世紀B.C.	パーニニ『サンスクリット語文典』	(インド)
4世紀	プラトン『クラテュロス』	(希)
2～1世紀	トラックス『ギリシア語文典』	(希)
1世紀	ワロー『ラテン語について』	(羅)
5世紀A.D.	プリスキアン『ラテン語文典』18巻	(羅)
8～9世紀	弘法大師：音声学者(音節文字考案)・文法学者	(日)
10世紀	エルフリック『文法』(プリスキアン抜萃の翻訳)	(英)
1150ごろ	作者不詳『古アイスランド語音韻論』	(アイスランド)
1309	ダンテ『俗語論』(ロマンス諸語分類に言及)	(伊)
1555	ゲスナー『ミトリダーテス』(主の祈り22か国語)	(独)
1603	『日葡辞書』(日本耶穌会が長崎学林で刊行, 3万項目)	(日)
1660	『ポール・ロワイヤルの一般・理性文法』	(仏)
1772	ヘルダー『言語の起源』(ヘブライ語起源に反対)	(独)
1782	ルソー『言語の起源』	(仏)
1786	サー・ウィリアム・ジョーンズ：サンスクリット語・ギリシア語・ラテン語などが一つの祖語に由来することを提唱	(英)
1806—	アーデルング／ファーター『ミトリダーテス』500言語収む	(独)
1808	シュレーゲル：はじめて「比較文法」の用語を用いる	(独)
1814	ラスク『古ノルド語または古アイスランド語の起源』(印刷1818)	
	ここではじめて音韻対応の概念をつかむ	(デンマーク)
1816	ボップ『サンスクリット語動詞活用体系』	(独)
1819—47	グリム『ドイツ語(ゲルマン諸語)文法』4巻	(独)
1822	クラブロート『アジア博言集』	(独)
1822	パリ・アジア協会編『アジア学雑誌』(JA)創刊, 現在続刊	(仏)
1822—24	シャンポリオン：エジプト聖刻文字の解説	(仏)
1833—49	ボップ『サンスクリット語・ギリシア語…比較文法』2巻	(独)
1836—40	フンボルト『ジャワ島におけるカーヴィ語について』	(独)
1845—49	カストレン：ウラル諸語・アルタイ諸語の実証的研究(フィンランド)	
1847	『ドイツ東洋学協会雑誌』(ZDMG)創刊, 現在続刊	(独)
1852	『比較言語学雑誌』(KZ)創刊(Adalbert Kuhn), 現在続刊	(独)
1855	シュタインタール『文法, 論理学, 心理学』	(独)
1856	コールドウェル『ドラヴィダ諸語比較文法』	(英)
1858	ボラー『日本語がウラル・アルタイ語に属することの証明』	(独)
1861	シュライヒャー『印欧語比較文法綱要』(系統樹説)	(独)
1866	パリ言語学会創立	(仏)
1868	『パリ言語学会紀要』(BSL)創刊, 現在続刊	(仏)
1872	ヨハネス・シュミット：系統樹説に対し波紋説を提唱	(独)
1876	ライブツィヒに青年文法学派の抬頭	(独)
1876	ヴェルナー：ゲルマン語子音推移例外の条件を発見	(デンマーク)

1876	フォルトゥナートフ：モスクワ大学で言語学講義を開始	(露)
1878	ソシュール『印欧語母音原始組織考』	(スイス)
1880	パウル『言語史原理』(邦訳 1965福本)	(独)
1886-1900	ブルークマン/デルブリュック『印欧語比較文法』5巻	(独)
1887	アスコリ：言語基層説	(伊)
1887	ザメンホフ：エスペラント語考案	(ポーランド)
1889	バチェラー『アイヌ英和対訳辞典』	(日)
1893	トムセン：オルホン碑文解説(古チュルク語)	(デンマーク)
1893-1911	ラドロフ『チュルク諸方言辞典』4巻(再版 1960)	(露)
1894	イエスベルセン：言語の歴史は退化でなく進歩である	(デンマーク)
1894	東京帝国大学において上田万年が言語学の講義を開始	(日)
1897	ブレアル『意味論の試み』(1883年 <i>sémantique</i> の用語使用)	(仏)
1900	ヴント『民族心理学』第1巻『言語』	(独)
1900-12	ジリエロン『フランス言語図巻』	(仏)
1905	トロンベッティ『言語一元論』	(伊)
1906-11	ソシュール：ジュネーヴ大学で一般言語学の講義	(スイス)
1908-13	ブロッケルマン『セム諸語比較文法綱要』2巻	(独)
1910	金沢庄三郎『日韓両国語同系論』	(日)
1911-38	ボアズ『アメリカ・インディアン諸語大鑑』3巻	(米)
1916	ソシュール『一般言語学講義』(バイイとセシエ刊行)	(スイス)
1917	フロズニー：ヒッタイト語解説(印欧語族に所属)	(チェコ)
1921	サビア『言語』(邦訳：1943木坂, 1957泉井)	(米)
1922	神保格『言語学概論』	(日)
1924	アメリカ言語学会創立(雑誌 <i>Language</i> 1925創刊)	(米)
1924	メイエ/コーアン『世界の言語』初版(邦訳 1954)	(仏)
1925	バルトリ『新言語学序説』	(伊)
1926	ブラーグ言語学団の創立(マテジウスを中心に)	(チェコ)
1926	日本音声学会創立(会長：上田万年)	(日)
1928	第1回国際言語学者会議(ハーグ, C.C.Uhlenbeck)	(オランダ)
1928	シュハルト『一般言語学論集』第2版	(独)
1928	小林英夫訳 ソシュール『言語学原論』	(日)
1929	『ブラーグ言語学団論叢』(TCLP) 創刊	(チェコ)
1929	ギョーム『時制と動詞』(心理学的構造主義)	(仏)
1931	第2回国際言語学者会議(ジュネーブ, Ch. Bally)	(スイス)
1931	金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』	(日)
1931	トリーア『知性の意味領域におけるドイツ語彙』(語場理論)	(独)
1931-32	有坂秀世(昭6) 池上禎造(昭7)：上代日本語母音調和発見	(日)
1933	第3回国際言語学者会議(ローマ, P.E.Pavolini)	(伊)
1933	ブルームフィールド『言語』(アメリカ構造言語学)	(米)
1933	コペンハーゲン言語学団創立(イエルクスレウ, プレンゲル)	(デンマーク)
1934	ビューラー『言語理論』	(独)
1934	カルナップ『言語の論理学的統辞論』	(米)
1934	ファースを中心にロンドン学派の研究開始	(英)
1936	第4回国際言語学者会議(コペンハーゲン, O.Jespersen)	(デンマーク)
1936	金田一京助『アイヌ語文法概説』, ユーカラ刊行開始	(日)
1938	日本言語学会創立(会長：新村出) 1939『言語研究』創刊	(日)

1939	第5回国際言語学者会議（ブリュッセル，開催中止）	（ベルギー）
1939	トゥルベツコイ『音韻論綱要』	（チェコ）
1939	構造言語学国際誌 <i>Acta Linguistica</i> 創刊	（デンマーク）
1940	ジュネーヴ言語学会創立，雑誌『ソシュール・ノート』	（スイス）
1940	市河三喜編『英語学辞典』	（日）
1940	有坂秀世『音韻論』	（日）
1941	時枝誠記『国語学原論』言語過程説	（日）
1943	イェルムスレウ『言語理論序説』（ <i>OSG</i> ）	（デンマーク）
1944	国語学会創立（会長：橋本進吉），1948『国語学』創刊	（日）
1945	雑誌 <i>Word</i> （ニューヨーク言語学団編集）創刊	（米）
1948	第6回国際言語学者会議（パリ，J.Vendryes）	（仏）
1948	国立国語研究所創設	（日）
1949-50	ヴァイスゲルバー『ドイツ語の諸力について』	（独）
1950	スターリンによるマル学説批判	（露）
1951	ハリス『構造言語学の方法』	（米）
1952	第7回国際言語学者会議（ロンドン，Sir Ralph Turner）	（英）
1952	メイユ／コーアン『世界の言語』改訂第2版	（仏）
1952	ウォーフ『後段言語学論文集』	（米）
1952-55	市河三喜ほか編『世界言語概説』2巻	（日）
1953	ヴェントリス／チャドウィック：ミュケナイ文字解読	（英）
1953	イェルムスレウ『言語理論序説』（英語，改訂版）（訳述 1959林）	（米）
1954	高津春繁『印欧語比較文法』	（日）
1955	国語学会編『国語学辞典』	（日）
1956	ソ連で構造言語学に関する議論が始まる（シャウミャンなど）	（露）
1957	第8回国際言語学者会議（オスロ，A.Sommerfelt）	（ノルウェー）
1957	チョムスキー『文法の構造』（邦訳 1963勇）	（米）
1959	テニエル『構造的統辞論要理』	（仏）
1960	マルティネ『一般言語学要理』（邦訳 1972三宅）	（仏）
1960	東ベルリン『構造文法』発刊（連続刊行物）	（独）
1961-	初の本格的な『言語学辞典』（J.Knobloch編）刊行開始	（独）
1962	第9回国際言語学者会議（ケンブリッジ／マサチューセッツ，E.Haugen）	（米）
1962	ヤコブソン『選集』全7巻の刊行開始	（オランダ）
1963	シビオック編『現代言語学の動向』刊行開始	（オランダ）
1964	服部四郎編『アイヌ語方言辞典』	（日）
1965	チョムスキー『文法理論の諸相』（邦訳 1970安井）	（米）
1965	シャウミャン『構造言語学』	（露）
1966	ヨーロッパ言語学会創立（雑誌 <i>Folia Linguistica</i> ）	（オランダ）
1966-75	国立国語研究所編『日本言語地図』全6巻	（日）
1967	第10回国際言語学者会議（ブカレスト，I.Iordan）	（ルーマニア）
1968	チョムスキー／ハレ『英語の音型』	（米）
1972	第11回国際言語学者会議（ボローニャ，G.Devoto）	（伊）
1973	日本語の起源についてのシンポジウム（日本言語学会）	（日）
1976	上代日本語母音体系についてのシンポジウム（日本言語学会）	（日）
1976	日本音声学会編『音声学大辞典』	（日）
1977	第12回国際言語学者会議（ウィーン，W.Dressler）	（奥）
1982	第13回国際言語学者会議（東京，S.Hattori）	（日）

	ラテン	フランス	イタリア	スペイン	ルーマニア
《叔母》	amita	tante	zia	tia	mătușă
《耳》	auricula	oreille	orecchio	oreja	ureche
《叔父》	avunculus	oncle	zio	tio	unchiu
《空》	caelum	ciel	cielo	cielo	cer
《牝山羊》	capra	chèvre	capra	cabra	capră
《市民権, 町》	civitas(civitatem)	cit�	citt�	ciudad	cetate
《身体》	corpus(corpus)	corps	corpo	cuerpo	corp
《鉄》	ferrum	fer	ferro	hierro	fier
《息子》	filius	fil�	figlio	hijo	fiu
《娘》	filia	fille	figlia	hija	fiic�
《兄弟》	fr�ter	fr�re	fratello	hermano	frate
《法律》	l�x(l�gem)	loi	legge	ley	lage
《手》	manus	main	mano	mano	m�n�
《母》	m�ter(m�trem)	m�re	madre	madre	mam�
《机》	m�n�sa	table	tavola	mesa	mas�
《夜》	nox(noctem)	nuit	notte	noche	noapte
《目》	oculus	�il	occhio	ojo	�chiu
《父》	pater(patrem)	p�re.	padre	padre	tat�
《4》	quattuor	quatre	quattro	cuatro	patru
《5》	quinque	cinq	cinque	cinco	cinci
《岸》	r�pa	rive	ripa	ripa	r�p�
《姉妹》	soror(sororem)	s�ur	sorella	hermana	sor�
《時間》	tempus(tempus)	temps.	tempo	tiempos	timp
《頭》	testa	t�te	testa	cabeza	cap
《3》	tr�s	trois	tre	tres	trei

「言語学の誕生」 風間喜代三(岩波書店)

	サンスクリット	ギリシア	ラテン	
《火》	agni-		ignis	(露 ogonī)
《ある》	āsti(3人称単数)	estī	est	(英 is)
《運ぶ》	bhārāmi(1人称単数)	phérō	ferō	(英 bear)
《兄弟》	bhrātar-	phrātēr	frāter	(英 brother)
《母》	mātār-	mātēr(方言形)	māter	(英 mother)
《鼠》	mūs-	mūs	mūs	(英 mouse)
《雲》	nābhas-	néphcs	nebula	(独 Nebel)
《夜》	nākt-	núks	nox	(英 night)
《名》	nāman-	ónoma	nōmen	(英 name)
《舟》	nāu-	naūs	nāvis	
《巢》	nīdā-		nīdus	(英 nest)
《足》	pād-	pēs(方言形)(pōda)	pēs(pedom)	(英 foot)
《主(たる)》	pāti-	pōsis	potis	
《父》	pitār-	patēr	pater	(英 father)
《新しい》	nāva-	nēos	novus	(英 new)
《7》	saptā	heptā	septem	(英 seven)
《うすい》	tanú-	tanú-(合成語前分)	tenuis	(英 thin)
《3》	trāya-	treīs	trēs	(英 three)
《男》	virā-		vir	
《くびき》	yugā-	zugôn	jugum	(英 yoke)

「言語学の誕生」風間喜代三(岩波書店)